

研究レポート1

職業人としての自立を視野に入れる教育の効果とは ——専門学校生調査からみえてくること



横浜市立大学名誉教授
中西 新太郎

1948年生まれ。鹿児島大学教育学部勤務を経て、1990年～2014年、横浜市立大学勤務。現在、横浜市立大学名誉教授。専攻領域は現代日本社会論、文化社会学で、とりわけ青少年の社会化過程に深く関わる青少年文化の特質、青少年支援のあり方等に関心を寄せる。主な編著書として、『問題』としての青少年』、『シャカイ系の想像力』、『ノンエリート青年の社会空間』（編著）、『人が人のなかで生きてゆくこと 社会をひらく「ケア」の視点から』等がある。

1 専門学校生を対象とする初の大規模調査

高校卒業時の進路選択の対象に専門学校が定着してすでに30年以上が経つ。多くの若者が専門学校にすすむようになり、専門学校の社会的認知はすすんだ。しかし、その実像は意外に知られていない。

知られていない大きな理由は、専門学校での学習・教育の実態や専門学校を選択する若者の意識、職業アスピレーション等に関する調査が不足していることにある。大学生に関する各種の調査と比較すれば不足は一目瞭然である。インテンシブな質的調査の成果は近年ようやく現れるようになったが、専門学校生の実態を包括的にとらえる量的データは存在しなかった。「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」はこの空白を埋めるもので、全国各地域、各専門分野にわたる専門学校生を対象とした大量調査として、専門学校生に関する基礎データを得ている。調査結果は、専門学校の機能や役割についてファクトを踏まえた議論をすすめるための出発点になるだろう。

調査結果が示す豊富なインプリケーションについては個別的分析結果が報告されることになるが、今回の調査によって専門学校像のステレオタイプと実像との落差が浮き彫りにされた点を強調しておきたい。ステレオタイプとは、「専門学校は職業にただちに役立つ実用的スキルの習得を目的とし実現する教育機関だ」という見方であり、また、「専門学校は広い視野や社会人としての教養を軽視する実用主義の教育機関だ」という否定的評価である。前者の肯定像、後者の否定像どちらの立場をとるにせよ、専門学校が職業訓練に特化した場としてイメージされている点は共通である。しかし、このイメージは専門学校での学びの実態に照らすなら正確ではなく誤解をふくむ。今回の調査はそのことを明確にしたといえる。

専門学校における教育と学びが職業的レリバンスを核心にすえていることは事実である。進学決定時に、「つきたい職業に対するイメージや理想像を（とても+まあ）もっていた」者は73.1%と多数派で、将来展望として、「学校で学んだ内容をいかして仕事をしていきたい」（とても+まあ）92.5%と、就きたい仕事・職業を軸に専門学校での学びをとらえる姿勢が明瞭である。

このように、仕事・職業と結びつけて学びを位置づける姿勢は、ただし、専門学校がもっぱら即戦力としての職業的スキル習得の場であることを意味しない。職業的レリバンスを核とする教育と学び=実践的（実用的）職業スキルの訓練・習得過程ではない。前者と後者とのあいだには、一見微細に見えるが看過できないちがいがあるように思える。ちがいを簡潔にまとめるなら、仕事に就くこと、すなわち職業人として社会に位置づく過程（職業的社会化）は後者のような就業に直接結びつく職業スキル習得には収まりきれない射程と内実を持つということだ。今回の調査から浮かび上がってきたのは、専門学校での教育と学び（専門学校らしさ）がそうした射程と内実にかかわっているという点である。

以下、調査結果を踏まえ、この意味での「専門学校らしさ」が、いわゆる学校から社会への移行 school to work transition における教育戦略、教育課題に与える示唆を、大づかみに指摘したい。

2 専門学校進学者の高校生活像

今回の調査では、専門学校在学時の実態・意識と並んで、高校時の意識を設問に加えている。専門学校卒業生への調査（「専門学校での学びと社会への移行に関するふりかえり調査」2016年）と合わせ、専門学校を經由しての職業的社会化過程に関する時系列の変化が提供されたことになる。調査項目に限りがあり包括的とは言えな

いが、専門学校経験がどのような特徴を持つキャリアラダーであるのか、一応の見通しが立てられるようになった。

そこでまず、専門学校進学生の平均的な高校生活像を確認しておこう。平均的とは、各設問でのボリュームゾーンに位置するというくらいの意味である。

表1-1

(%)

入学までに力を入れたこと/学校での学習	52.2
入学までに力を入れたこと/学校行事	67.7
入学までに力を入れたこと/部活動	58.5
高校時代の様子/授業に真面目に出席した	84.8
高校時代の様子/出された課題や宿題はきちんとした	74.7
高校時代の様子/計画を立てて勉強した	31.9
高校時代の様子/進路や将来について積極的に考えた	67.4
高校時代の様子/授業についていけないと感じた	32.9

注：数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合

ここにピックアップした項目から窺えるのは、高校教育にそれなりに順応し学校世界にインボルブされている(逸脱していない)すがたではないか。授業に出席し出された課題はきちんとこなす。授業が難しくついていけないと感じた層は少なくはないが少数派だ(この意識は科目にもよるだろう)。学校行事やクラブ活動にもどちらかと言えば熱心な方が多い。

ただし、このような真面目さが学習面での自主性や計画性とイコールでない点に注意したい。興味・関心を活かしグループワークにも積極的に持続的に学ぶといった理想型にあてはまるとは言えず、成績も上下それぞれ15%をふくめきれいな正規分布の内での中位層(真ん中34.0+真ん中より上18.9+真ん中より下18.0=70.9%)である(男女別では、男子の成績がやや下方に振れ、10ポイント程度の差がある)。学習活動の諸側面をみると、縛りの強い出席や課題・宿題提出を除き、「まああてはまる」「あまりあてはまらない」回答層がおおよそ7割前後を占める。ここでの「まあ」と「あまり」の意識差が必ずしも画然としたものではないと考えるなら、高校での学習作業を必要な範囲と強度でクリアしているすがたが浮かび上がる。「それなりに順応」と述べたのはこの意味である。

つけ加えれば、高校生活像・学習像は普通に(堅実に)高校生活を送る生徒の平均的すがたと言えそうだ。そしてその点で大学進学生とのあいだに明瞭なちがいはあるとは思えない。大学進学の高難しさから専門学校進学を選択するという通念は専門学校進学生の実態にそくしていない。

3 職業人として社会に出る展望をひらく

専門学校生が自己の将来像と、これにかかわって重要と考えていることがらについてどうとらえているかを概観しよう。これらは、専門学校在籍時点での職業アスピレーションとそこに向かう努力の内容を知る上で有益な指標である。

将来像についても重要と考えることがらについても鮮明で興味深い特徴を看取できる。

まず将来像について、「とても+まああてはまる」の回答割合が高い順に示す。

表1-2

(%)

①学校で学んだ内容をいかして仕事をしていきたい。	92.5
②家族など身近な人の幸せを大切に暮らしたい。	92.5
③くらしは人並みでも安定した仕事をしたい。	91.5
④自分の将来に不安を感じる。	78.0
⑤社会に貢献することを大切に暮らしたい。	73.7
⑥地元で生活や仕事をしたい。	69.8
⑦大都市で生活したい。	49.1
⑧リスクを冒しても、高い目標にチャレンジする仕事をしたい。	43.3

①は職業的レリバンスに重心があると考えれば当然の結果である。仕事と生活の安定性を求める志向(②③)もきわだっている。大都市志向(⑦)よりも地元志向(⑥)、仕事での高い達成を望む意識の低さを加えれば、専門学校で学んだ内容をいかしながら「普通の幸福」と仕事の安定を望む意識が明白である。

安定志向と呼ばれる②、③の意識は各種の高校生調査でも多数を占め、しばしば、若者の夢のなさを示す証拠に挙げられる。だが、そうした理解は短絡的であり、むしろ、職業人として生きる将来を現実的に見ずえる段階で得られるリアルな(地に足の着いた)感覚として受けとめるべきだろう。⑤に示されるように、この感覚は、たんなる私生活主義ではなく、社会に役立つための努力とも併存しうるものである。

では次に、将来の自分について重要と考えることがらについて、高比率順に示そう。

表1-3

(%)

①社会人としての基礎的な能力を身につけること	97.3
②専門的な知識・技術・ノウハウを身につけること	96.0
③基本的な学習態度、学び方を身につけること	95.4
④労働者としての自らの権利を守る知識や情報を知ること	94.4
⑤職業につながる資格を取得すること	93.0
⑥教職員やクラスメートと人間関係を築くこと	91.3

注：数値は「とても重要」+「まあ重要」と回答した割合

いずれの項目も9割を超え、専門学校生の大多数が将来に向けて重要と考える内容であることを示唆する。そして、③④⑥の結果からわかるのは、就業分野に役立つスキル、ノウハウを身につけることにとどまらない、職業人としての力を養うことへの期待である。社会人としての基礎的能力(①)の内実も、それぞれの職業分野に特化した能力内容よりも広いことが推測できる。

以上をまとめると、職業人として社会に定着するために有益な基礎を身につける場・機会として専門学校教育が位置づけられており、かつ、目指される職業人のあり方は、「普通の(安定した)働き方とこれに照応する人並みで落ち着いた暮らし方」ということになろう。

4 専門学校での学びで何が身につくか

上述した職業人としての能力形成に専門学校教育はどのように寄与しているだろうか。

専門学校での学びを通じて身についた力についての自己評価は概して高い。(23項目中、「かなり・ある程度身についた」とする回答が7割超11項目、65%超4項目)7割以上の項目は以下のとおりである。

項目	割合
①専門分野の知識・技術	81.3
②人と協力しながら物事をすすめる	80.8
③自分自身の強み弱みを把握する	80.1
④必要な情報を収集・整理する	79.0
⑤学び続ける姿勢を持つ	77.9
⑥なにがとも粘り強くとりくむ姿勢を持つ	76.3
⑦自分で目標を設定し、計画的に行動する	76.0
⑧現状を分析し、問題点や課題を発見する	75.7
⑨自分の考えを相手に伝えるように話す	71.0
⑩グループの中で責任を持って行動する	70.8

専門分野での知識、スキルの獲得(①)と並んで、持続的に学び続ける姿勢(⑤、⑥)や計画性(⑦)、作業を進めるのに必要な社会性(②、⑨、⑩)が身についたとする点に注目したい。自分と自分が抱える課題を客観的につかむ項目(③、⑧)をふくめ、これらの力は、将来の職業生活にとり必要なものとして位置づけられている。前節でみた、「将来の自分について重要と考えることがら」と見事に照応していることから、そう推測できる。

身についた力に関する上述項目群の高い自己評価は、専門学校での教育の特徴と無関係ではないだろう。教育と学びの特質に関する分析は別稿に譲るが、高校時と比較し学習姿勢が積極的に変容している様子は以下の項目

から窺えよう。

高校	「計画を立てて勉強した」 31.9
↓	
専門学校	「計画を立てて学ぶ」 49.8(+17.9)
高校	「興味を持ったことについて自主的に学習した」 52.1
↓	
専門学校	「授業で興味をもったことについて自主的に学ぶ」 67.6(+15.5)

以上の検討から浮かび上がるのは、職業的レリバンスが重心となっている学びの組織がもつ意義である。「学んでいる内容と将来の関わりについて考える」ことが、「よくあった・ときどきあった」80.7%という回答はそれを象徴している(プレスリリース参照)。入学前と現在を比較して「働くこと」のイメージが「とても・やや良くなった」54.6%という結果も興味深い。「変わらない」35.1%、「やや・とても悪くなった」8.2%。職業生活の具体的様相にまで目を向ける(向けざるをえない)学びをつうじて、不安はあるものの、職業人として生きるライフコースへの肯定的な視線が育っているように思われる。

5 専門学校教育の社会的意義と課題

以上のような専門学校における学びと教育の特質は、職業人養成という課題を狭くとらえることの危険を示唆する。本稿で示した専門学校生多数派の裏側には、専門学校生活(その中心は職業的レリバンスを軸に組み立てられたカリキュラムと学びである)にうまくフィットしないざっと3分の1弱から4分の1強の層の存在が推測される。分野選択のミスマッチ等、その原因については今後の検討を要するが、重要なのは、専門学校には固有の教育機能が備わっているという点であろう。

高校における進路指導にさいしても、この点の認識は重要である。専門学校を、職業的レリバンスを踏まえた学び直し、学びの再発見が可能な場として認知し位置づけることで、先に述べた意味で普通の高校生活を送る生徒にとって意義ある選択肢を提示できるからだ。「大学に送りこめば成功」という指導観が終焉を迎えているいま、職業世界とより直接かつリアルに対面できる場での学びの特徴と効果を踏まえた進路指導が求められている。

大学教育が直面する課題の把握にとっても、専門学校での学びと教育とは示唆に富んでいる。参考値ではあるが、大学生に比して高い学習意欲や姿勢(プレスリー

ス参照) から浮かび上がるのは、職業人として社会に位置づくために必要な課題と方法とは何かという視点で学びの組織をとらえることが大学教育でも必要ではないかという問いである。

それは、「教養ではなく実用的知識を」といった短絡的な要請に応えようということではない。専門学校における学びにも社会人として求められる教養の次元（仕事にすぐ役立つという尺度では測れない次元）が存在していた。教養を身につけさせるとする大学教育は、学生が自分たちの生きる世界に向かい合い読み解けるだけのリアリティ（具体性）や深度で教養の教育を組織しているか。問われているのはこの点であり、「職業人として

社会に位置づく」という重心がもたらす教育効果をそうした視点から受けとめることができよう。グローバル・コンピテンシー等での専門学校教育の不足を指摘するのは容易いが、優越性の感覚をにじませた役割分業論で大学教育の利点を言うことはできない。「普通の高校生」が大学へも専門学校へも進学するという進路選択の現実を照らして、大学での教育と学びを問うべきなのである。

就職にすぐ役立つ職業的スキルの習得機関という専門学校認知は、専門学校教育が現実を果たしている機能を狭くとらえている。今回の調査で示された豊富な教育機能にそくし、専門学校教育の充実が構想されるべきではないか。